江戸のＦＤ ―『徒然草』講釈指南書をよむ―

川平　敏文（日本近世文学）

こんにち大学では、しきりにＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）という言葉が飛び交う。ＦＤとは、教える技術（Faculty）を向上させること（Development）である。かつて「大学の先生」と言えば、それはほぼそのまま〈研究者〉であることを意味し、〈教育者〉という一面は必ずしも強くは意識されなかった。しかしあらゆる大学が完全に大衆化し、市場原理によって動こうとしている現在、大学は教育の最前線である教室にどうやって学生をつなぎ止めるかを、真剣に考えなければならなくなった。そのためには、教材選び、講義の組み立て、声の大きさや板書のしかた、教室の雰囲気づくりといった、きわめて基本的かつ実践的な教授技術を向上させる必要がある――ごく簡単に言えば、それがＦＤという動きの背景である。「大学の先生」はいまや、さながら講釈師のごとくに講義を盛り上げ、「今日はこれぎり。続きは次回の講釈にて」などと言って、来週また足を運んでくれるよう、学生に期待を持たせなくてはならない。私のような不器用な「大学の先生」にとっては、なかなか難しい時代に突入したと言わざるを得ない。

ところで、このＦＤ――教授技術の向上という事柄に関してだけいえば、日本にはそれに類する事柄が、古くから存在した。たとえば仏教の談義説法（説教）は、あまり知識のない人々を対象に、少々小むずかしい道理を説くものであるから、聴衆が理解しやすいよう、様々な工夫をこらしたものだ。「はじめシンミリ、なかオカシク、おわりトウトク（尊く）」というのは、真宗の節談（ふしだん）説教において、一回の説教の構成を大まかに捉えた言いかたであるが、より細かな技法の習得には、たいへん厳しい修行が課せられたという（関山和夫『説教の歴史』）。高座にのぼる時の作法、声の調子・抑揚、笑いの取りかた泣かせかた、それらは多く師匠や先輩の説教を見ながら体で覚えたものであろうが、平安時代には既に『転法輪秘伝』（醍醐寺蔵）などという本が編まれていて、説教の技法を一種のマニュアルとしてまとめたものも残っている。

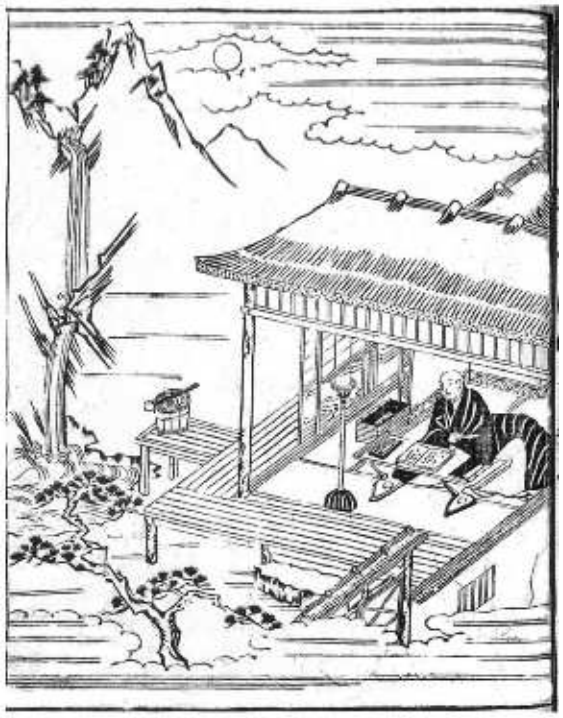
では、文学の教授に関してはどうであろうか。室町期あたりまでは、「文学」といえば古典を中心とした伝統文芸の世界を指すものであり、また基本的にそれは一部の限られた知識層の玩びものであった。したがって文学の教授といえば、教える内容そのものが大事なのであって、その教えかたが喋々されるようなことは、あまりなかったと考えら

れる。これは、エリートのみを対象とすればよかった、前時代の大学教育と似ている。しかし江戸時代に入ると、文明開化と称しても良い出版文化発達のおかげで、古典も従来にくらべて庶民層により近しい存在となる。これまで古典とは一生無縁で過ごしてきたような階層の人々が、それを学べる時代が到来したのである（もっとも庶民とはいっても、今日いうところの「大衆」とは、その規模において格段の差があることは言うまでもない）。そうなると今度は、このような新しい人々向けの教えかたの工夫が必要となってくる。では実際にどのような工夫が為されたのか。江戸人がもっとも親しんだ古典の一つ、『徒然草』を取り上げて、それを瞥見してみることにしよう。

○

『徒然草』という書物は、周知のとおり鎌倉末期の成立である。しかし、現在知られているそのもっとも古い読者は、正徹（しょうてつ）という室町期の歌人である。その後、本書は連歌師や歌人、僧侶などによって読み継がれていったのであるが、この書物が古典として一般的に認知され、しっかりした評価を得るのは、なんといっても江戸時代以後のことである。先にも述べたように、江戸時代は出版の時代。『徒然草』はこの出版文化の拡大に伴って、まさしく全国規模で読者を持ち始め、一種の流行現象を巻き起こす。旧来の仏教思想を中心としながら、新しい儒教思想をかすめたその内容、伝統的な雅文の系脈にありながら、けっして論理性を失わない達意の和文。つまり『徒然草』は、思想と文芸との両方を学ぶことができる書物として歓迎されたのである。たとえば、『源氏物語』や『伊勢物語』からは、文章は学ぶことはできても、高邁な思想は学びづらい。『論語』や『法華経』からは、思想は学ぶことはできても、達意の和文は学べない。『徒然草』はその点、まことに絶妙の内容を兼ね備えていたわけであった。

かくのごとく『徒然草』は人気の古典であったため、市中でこの書が教授されることも、決して珍しくはなかった。



延享五年刊『徒然草』より

儒学者から俳諧師まで、実に様々な人々が本書を取り巻いて、あれやこれやと議論したのであったが、そうした中から、講釈の上手と言われるような人も出てきた。

たとえば備前岡山の人で、元禄頃に大坂で活躍した学者に岡西惟中という人がいる。儒学・和歌・俳諧と、様々な方面の知識を有し、加えて根っからの論争好き。この人が伊予に招かれたとき、こんなことがあった。

俳士あまたつれ〴〵草を講ぜむ事をこふ。のぞみにまかせて、浄蓮寺・法泉寺の両亭にして日々、辰の剋より講莚をひらく。老若貴賤の族、尤士僧の歴々凡二百有余人、群をなして列につく。

（口語訳＝たくさんの俳諧師たちが私に、『徒然草』の講釈を懇望した。その望みにまかせて、浄蓮寺・法泉寺という二つの場所を使って、毎日辰の刻（午前八時頃）から講釈会を開いた。老若貴賤の人々、あるいは歴とした武士や僧侶のお方々など、およそ二百有余人が群れをなして列席した。）

（『白水郎紀行』）

二百人というのは誇張に過ぎると思われるかもしれないが、後に紹介する資料の著者の一人、斉藤唱水という人物が高知城下で行なった観音経の講釈は、やはり市中に二百人を動員し、一回ではとても座敷に入りきれないので、二回の入れ替え制にして行ったともいうから、あながち虚誕とも言えない。

また元禄から少し後、井原西鶴没後に多数の浮世草子を執筆して人気作家となった、都の錦という人がいる。この人もなかなか面白い経歴の持ち主で、京都でひとしきり執筆活動をした後、江戸に出ていた時に何らかの罪を得て捕らえられ、九州は薩摩山ヶ野金山へ流刑に処せられた。無宿浪人として検挙されたというが、まさかそれくらいでこれほどの罪は蒙るまい。弁舌巧みの人であるから、何らかの舌禍あるいは筆禍があったのではないかと勝手に想像しているが、いまだ裏付けは取れていない。

罪人として護送される時、この人は鉄舟と名乗っていた。

流人鉄舟は吉田家家人の由。御国へ被為下候節、船中にてつれ〴〵草をのみ見候故、船中宰領人も講釈いたし候様、申候得ば、先神道にてよみきかせ可申とて、始終神道にて講釈終り、又仏道にてよみ終り候。誠に博智の者にて候。

（口語訳＝流罪人鉄舟は吉田家（古くからの神道の家柄）家来であるとの由。御国（鹿児島）にお下しになられた時、船中で『徒然草』ばかりを読んでいたので、宰領人が鉄舟に講釈をするよう言いつけたところ、彼は「まず神道によって講じてお聞かせ申し上げましょう」と言って、始めから終わりまで神道で講釈を終えた。それからまた同じように、仏教に

よっても講釈し終えた。誠に博学広智の者で御座いました。）

（『三晩庵随筆』巻下）

神道を根本としても、仏教を根本としても講釈できたというので、この人の博識ぶりが知られるのであるが、同時にそのように様々な角度からの読み込みが可能であるところに、『徒然草』の講釈素材としての特性が出ている。ちなみに都の錦には『女訓徒然草』なる注釈書があり、彼の解釈の一端がうかがえる。

当時『徒然草』は、このような講釈の上手たちによって講じられる機会も多かったのであるが、ここにその講釈指南書ともいうべき一本がある。題して『徒然草大意読方秘伝抄』（以下『秘伝抄』と略す）。京都大学文学部の蔵にかかる。大本（B5判）一冊、二八丁（五六頁）の手書き本で、元禄十五年（一七〇二）の奥書を有す。巻頭の署名から、著者は随世軒一器子、および斉藤唱水なる人物の共著であると判断されるが、前者については伝未詳。後者はもと江戸の人で、高知藩主山内豊房に迎えられ、様々な書物を講釈して生計を立てていた、いわばプロの講釈師である。

書名の「大意」とは、『徒然草』の（要点・眼目）の意、「読方」とは、（講釈のしかた）の意で、いわば『徒然草』の教師用参考書のようなもの。ちなみに江戸時代までは、「読む」と言えば音読のこと、声を出してテキストを朗誦することの謂いであった。聴衆の面前でテキストを朗誦すれば、正確な解釈をほどこして意味を明らかにする必要も生じよう。「読む」という言葉はそこから、聴衆の前で（講釈する）という意味をも持つようになったと考えられる。

それはともかく、つまりこの『秘伝抄』は、どのように『徒然草』を教えれば効果的かという、その具体的な技法が書かれた書である。『徒然草』を（どう理解するか）を書いた本は多数あるが、（どう教えるか）を書いたものは非常に珍しい。さて、その内容やいかに。

○

まずは惣論として次のようなことが言われる。

儒・釈・道・神道・因縁・有職・幽玄、其の色々を書き顕されし上は、読まん人、何れの道をも心得て読むべし。但し読むによみ様あり。儒の所を専用と書かれし所をば、儒を成程本意と大事に、儒者と我が身をおもひてよむべし。仏法を大事とかゝれし所は、仏者となりて読むべし。

（口語訳＝兼好が『徒然草』に、儒教・仏教・道教・神道・因縁・有職・幽玄など、色々な道を書き表している以上、講釈する人は、どの道をも心得た上で講釈すべきだ。ただし講釈にしかたがある。儒教をもっぱらとして書かれた所は、儒教をやはり本意として大事にし、自分が儒学者になったつもりで講釈

する。（同様に）仏法を大事と書かれた所は、仏教者となったつもりで講釈するのだ。）

『徒然草』が様々な「道」のエッセンスを内包していると考えられたことは前に述べた。これを講釈する者は、そのいずれの道の学問をも修め、その章段の心に応じて、臨機応変にその講じかたを変えなければならない。たとえば儒教だけ、あるいは仏教だけで『徒然草』を講釈しては、兼好の本意には近づけないというのである。

ところで、講釈において忘れてならないのは、聴き手の存在である。いかに高遠な思想を教えようとしても、聴衆にそれを受容する気構えや知識教養がなければ、まさしく馬の耳に念仏ということになり、良い講釈は成立しない。よって講釈する人は、まず聴衆の「機」をよく見極めて、どの章段を講釈すればよいかを判断する必要がある。「機」とは仏教語で、その人の心の状態と、ひとまずは考えておけばよい。「対機説法」という言葉があるように、仏教では人の心の状態を見て説法の内容を変化させることが重要とされた。

先の機を誉めて道に入る人有り。そしりて道に入る人あり。縦えば、若き人など道にいれんとならば、「あれたる宿の人めなき」、「万にいみじくとも」などゝ云段を、さも面白くよめば、取り寄るものなり。扨、実義を云たる、よし。ほむるやう、そしるやう、色々の手段あるべし。我執慢心の人は誉め、やはらか成人には、はきとそしりて、機を立たせて引き入る様も有る也。

（口語訳＝先方の機をほめてやると、道に入る人がいる。逆にそしることで、道に入る人もいる。たとえば、若い人などを道に入れようとするならば、「あれたる宿の人めなき」（『徒然草』第一〇四段）、「万にいみじくとも」（同・第三段）などという段を、さも面白いように講釈すると、乗ってくるものである。そうして後に、実義を教えるのが良い。ほめかた、そしりかたには、様々な方法があるものだ。自我が強くプライドの高い人はほめ、性格がおとなしい人にはビシッとそしって、機をふるい立たせて道に引き入れるやりかたもある。）

ここでいう「道」とは、儒教・仏教・道教といった特定の思想を表すのではなく、それらを括りにして、もう少し大雑把に把握されたところの道である。『徒然草』は、人を道に引き入れるための素材であるが、そのやりかたは講釈を聞く人の年齢や性向によって変える必要がある。若い人には若い人、プライドの高い人には高い人なりの、それぞれに見合った教えかたがあるのだ。

次は、講釈の大まかな流れについて。昔から「下手の長談義」と言えば、退屈で要領を得ない長話を指すが、そのような講釈は聴くに耐えないし、居眠りの一つもしたくな

る。それを防止するにはどうすればよいか。

講釈する時、府中に心を付くるといふ事あり。抑揚の挨拶也。是をよく心得べし。扨いふ詞遣ひを、いやしく耳にたつ様なる事、云ふまじき也。但し、府中しんになりて眠りきざす程ならば、とつと目を覚ます事は有るべし。是、狂言なり。たまさかの事なり。たとへをとる習あり。くわしくしるされず。さて、座の読みしまひに、はきとしたる高上の道理をさばくが能き也。さある時は次々の座、しむ物也。此の組み合せのつもり有るべき也。扨、詞くどからず聞こゆる様によむべし。

（口語訳＝講釈をする時、府中に心を付けるということがある。ほめたり、けなしたりという、あしらいである。これをよく心得るべきだ。そのとき、言葉づかいを下品にして、耳に立つようなことを言ってはならない。ただし府中がしんとして、聴衆に眠りが兆しはじめるほどならば、ハッと目を覚ますことはあるだろう。これは狂言である。めったにやるべきものではない。喩えをとる口伝があるが、くわしく記せない。そうして一回の講釈の終わりに、しっかりとした高尚な道理を言いさばくのがよい。そのような時は、後々の回もしみじみと落ち着いた雰囲気になるものである。この組み合わせの算段をしておくべきだ。そして言葉がくどくなく、わかりやすいように講釈すべきである。）

「府中」というのは「座中」と同義で、聴衆のことと思われる。また引用文五行目の文脈がやや言葉足らずで分かりづらいが、これは口伝であるから、詳しく記せないという事情もあったのだろう。

さて、筆者の経験に即して考えてみるに、眠気というのは人に感染するもので、そういう時は教室全体の空気が澱んだようになっている。このような場合に、やや言葉遣いを崩して雑談風の話をし始めると、とたんに学生の目が輝きを増し、空気が一新されることがある。教師ならば誰しも経験することであろうが、それを計算してとり行い、最後にきちんとした道理でまとめ上げるのが、上手の講釈なのである。

次に、文章を講ずる場合は、どのように読み解くかというだけではなく、どのように本文を朗読するかということも重要である。学生に本文を読ませると、どこで息継ぎをするか、どうアクセントを付けるかによって、その本文を理解できているか否かがおおよそ判断できる。また朗読の上手が読めば、『源氏物語』のような難解な文章でも、なぜかスッと理解できるものである。朗読は近年、教育上さまざまな点において注目されているが、もともと江戸時代においては、これは「素読」ないし「素読み」などと言われ、

学問の基本中の基本として、たいへん重視されていた。『論語』でも『源氏物語』でも、まずは声に出して読み上げることから始めるのである。さらに同じ古文であっても、物語と説話、軍記と有職とでは読みかたが違うのであって、『徒然草』各章段についても、その内容に応じて読み分ける高度な技術が求められた。

素読は、おちつけて静かによむ也。心持ちは、幽玄は声和らにおもしろく、のどかによむ也。源氏・伊勢物語の類ひによみなす。幽玄の中に哀傷有り。「風もふきあへず」「人のなき跡ばかり」抔の類ひ也。いかにも哀れによむべし。因縁の所は只常々すら〳〵とよむべし。保元・平治・盛衰記などよむたぐひなり。事を沢山にはりつめてよめば、学のたけあらはにして聞き能き也。有職の所は職原・禁秘抄の類なれば、落ちつけて、はきと読むべし。事すくなく埒明て、そこを慥にしらぬ様によみなすべし。儒道にては四書五経の講釈の如く、神道は殊勝を本として、道教はをとなしくよみなすべし。殊には仏道の所は声・言葉強々と、談儀をとく様に、はへてよむべし。中にも道念の所は、我をわすれて責め詰めて可読也。

（要約＝朗読は、心を落ち着かせて静かに読むものだ。気持ちとしては、幽玄の所は声を和らげて趣深く、穏やかに読み上げる。『源氏物語』『伊勢物語』の類に、いかにもしみじみと読むのだ。因縁（説話風）の所は、ただすらすらと読み上げる。『保元物語』『平治物語』『源平盛衰記』などの軍書を読むように、事柄をたくさんに張りつめて読めば、学識のほどが顕れて聞きやすい。有職故実の所は、『職原抄』『禁秘抄』の類であるから、心を落ち着けて、はっきりと読み上げる。こちらは逆に事柄を少なくして解説し、深い部分は確かに知らないように読むとよい。儒教の所は四書五経の講釈のごとくし、神道の所は神妙の気分を基本として、道教の部分は温和な落ち着きをもって読み上げる。殊に仏教の所は声・言葉を力強く発音し、談義を説くように勢いづいて読むのがよい。中にも、道念を述べた部分は、自分を忘れて責めただすようにして読むとよい。）

たとえば『源氏物語』を、軍書講談における「修羅場読み」のごとく畳みかけるように朗読すれば、一語一語、あるいはその文脈に流れる柔らかな時間の感触を失ってしまうであろうし、逆に『太平記』をゆっくりと、たゆたうように朗読しても、その死と隣り合わせの緊迫した空気を無視してしまうであろう。また儒教の講釈は理路整然と明快に説かれたであろうし、仏教の談義は聴衆の善根を奮い立たせるべく、要所にくれば鬼気せまる迫力で説かれたであろう。

こんにち我々が接する古典は、現代文と同じく平板な文

字列でしかないが、その長い歴史を遡ってみると、こちらは声というメディアによって立体的に再生され、伝えられてきた側面が非常に大きい。たとえば謡曲や平家語り、浄瑠璃などがその代表的なもので、それらはそれぞれに、ある一定の型（節）を持っている。その型は長い間の慣習によって培われたものであり、一種の無形文化財とも言えるが、そのようなジャンル別の朗読のしかたが意識されているところが興味深い。「音」によるジャンル意識というのは、我々にはほぼ完全に失われてしまった文化だ。

○

以上、若干を拾い読みしただけではあるが、『秘伝抄』の内容はこのように、江戸時代に古典がどのように教授されていたかを知る貴重な手がかりとなる。

「古典は（あるいは文学は）、ウチの大学に必要なのか？」という、ひと昔前までは考えられもしなかったような問いが、さまざまな大学で現実に問われ始めている。このとき我々がまず第一に為すべきことは、古典を、文学をいかに面白く教えるかということである。『秘伝抄』の最後の方に、

つれ〴〵一部の詞を空に覚ゆる程ならずんば、要にたちがたかるべし。覚ゆるは、志さゑあらばいと安き事なるべし。

とある。『徒然草』全体の文章を暗記するほどでないと、講釈の用には立たない。覚えるのは、志さえあれば非常に容易いことである、と。これは、教える技術については色々あるけれども、まずはその大前提として、教える自分そのものがしっかりと勉強していなければ、マアそのような技術は何の役にも立たないよと、著者が釘を刺しているのである。いかにも、うわべだけの技術を云々しても、学生は騙しきれないであろう。襟を正して拝聴申し候。

＊引用文は読みやすいように、濁点や送り仮名を私に補っている。

＊『秘伝抄』の内容、および文学史的な意義をより深く知りたい方は、拙稿『徒然草講釈考―元禄期の指南書から―』（『近世文藝』第八〇号、二〇〇四年七月）、『翻刻『徒然草大意読方秘伝抄』―元禄の古典講釈マニュアル―』（『文献探究』第四二号、二〇〇四年三月）を参照されたい。